
脱力系ダンシ

shiraha

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脱力系ダンシ

【Nコード】

N0213P

【作者名】

shiraha

【あらすじ】

脱力系ダンシな《山田シュウ》はいきなりの《門脇麻琴》の告白を逃げてしまう。何故かと言うと、色恋沙汰はかったりいと言うのだ。めんどくさがりでやる気の無い彼に恋は無関係なのか？そんな恋に臆病な男の子の話。

ブレイブリードック（前書き）

今回の主人公は、手強いです（笑）。脱力系ダンシと言うタイトルに近くなるよう精一杯書きます。

ブレイリードック

「好きだよ!」

「…ハイ?」

いきなり突拍子もない告白から始まってしまったが、俺、山田シユウは無言でその場を後にした。

まず今の展開を振り返ってみよう。

俺はサボっていた。適当に先公に見つからないような場所を見つけ、ソコでサボるのが日課。今日は、イイ所に段ボールの山がありその後ろに隠れた。

段ボールが背もたれになって丁度いい。

「こら!またサボって!しかも、その腰パンあり得ないって言うてんでしょ?」

世話やきババアが出た。クラスの俺を除く皆から信頼されてる女。サバサバしてて、男っぼい。髪はショートでスタイルは華奢？

「プレーリードック。」

「早く行くわよ。」

「お前プレーリードックに似てるよな。チンチンしてみるよ。」

殴られた。

「いつてえ。サボってるヤツ他にもいんだろ？椎原とか福井とか綾部とかさ。」

「今はあんただけなの！」

「腰パン他の奴もやってるだろ？会ったたび会った俺にだけ言って

さ。パンツの柄が可愛いからって嫉妬すんなよな。」

チャイムが鳴った。

「嫉妬はしないわよ。」

「じゃあ、俺が好きとか？」

と言う答えに「好きだよ！」と返ってきたわけだ。

門脇が俺が好きとかあり得ねえ。それ以前に女とかめんどいし。俺より強いし。

俺は逃げた。

授業の途中に教室に戻り、先公から喜ばれた。門脇はまだいない。ほっとする俺。

「スイマセン！遅れちゃいましたあ！」

「門脇ー、お前が授業に遅れるなんて珍しいな。」

チラ見すると、門脇の目がほんのり赤い。泣いたのかよ。そんなに俺のこと……。まさかな。

結局授業中爆睡した俺。隣の席の行正に聞く所によると俺のよだれが半端なかったらしい。

「シュウ…お前女子の目も気にしろよなあ。」

「気になんねえ気にならねえ気にしねえ。」

「もうちょいピシっとしてみ？モテるべ？」

横から佑樹がそんな事をほざいた。行正は優等生タイプで女子にチヤホヤされる。佑樹はスポーツマンタイプで女子と仲がいい。

俺は興味ない。誤解される前に言っが男にも興味ない。

「高校男子が女子に興味ねえとかあり得ねえっしょ！」

「お前ら彼女いるもんな。」

「幸せだよ。」

「ノロケは聞かないからな。」

行正のほんとに幸せそうな顔を横目に、俺は便所に向かった。

「麻琴大丈夫？」

「大丈夫だよ。」

「もー麻琴泣かないでよ。」

廊下で群がる女子。そして門脇麻琴を慰めている。

うわー通りずれえ。

でも通り道だから俺は知らん顔して通り過ぎた。が、誰も何も言わない。

ちらつと振り返ってみると、門脇が何で泣き出したか言わないらしい事が判明した。

「俺ひでー事した？」

「なんだよ急に。」

「朝から姉ちゃんに蹴られたんだよ。」

急に核心をつかれたと思ったら、隣のクラスの亮は自分のことを言っていたらしい。

「かったりい。聞けばいいじゃん。」

「だな。じゃ部活で！」

俺は便所から出た。

気持ちはスッキリしないのはアイツのせい？

まさかな。

ポーンッシュー

寒くて布団から出られない。

「シューウ！」

姉貴に毛布をひっぺがされた。

「死ぬー返してくれ姉貴ー。」

「はあ。情けない。何でそんなにナヨってんのよ。小さい頃は近所のワルガキから姉ちゃん守ってくれたじゃない。」

「うぜー。」

「なんですって！？起こしに来た姉ちゃんにウザイ？」

このやり取りで一気に目が覚めた。姉貴の前で着替える俺。

「腰パンするのはいいけど、何その蛍光色。」

「っせーな。暗闇で光んだよ。」

光らねえけど。

「マジ？彼氏に買ってあげようかな。」

「彼氏いつ出来たんだよ。まあ関係ねえけど。」

「さて姉ちゃんは出かけるかな。」

俺が女嫌いというか、付き合いたくないのは姉貴が原因かも知れない。

「今日帰らないかも。てへ。」

「キンモ。俺に言うなよ。」

「行って来まーす！」

俺も時計を見て、のんびり家を出た。遅刻しそうな時間だが、事故にあうよりマシだ。

家を出るなり、綾部が走っていた。綾部あきひと章人はサボり仲間。だか、あいつはおっちょこちょいというか、ドジでサボりたくななくてもサボってしまうタイプ。

「シュウ！お前遅刻すつぞ！走れ！」

あーあコケた。

「章人走るなって言われてるだろ。」

「つてー。他人事かよ！」

「焦っても遅刻する時はすんだよ。」

「待てよー！膝擦り剥いた。」

絆創膏をカバンから出して貼る章人は手慣れたモンだ。

「女子みてえ。」

「絆創膏が？」

「いつも持ってたのかよ。退くわー。」

シヨックを受ける章人を置いて俺は学校に向かった。

章人はアレだな。同性からモテるタイプ。イジられキャラっての？
そんな感じ。

そして俺はギリギリ遅刻しなかった。章人はギリ遅刻した。可哀想に。

「おはよー！」

休み時間、門脇が話しかけてきた。

「はよーさん。」

とは言うものの。気まずくて顔見れねえよ。

「昨日のことは…」

昨日のことは忘れてという展開か？席に着いてる俺は、それを期待して門脇を見上げた。

「昨日のことはなかった事にしないでよ。」

「やっぱり門脇はつえーな。」

にっこり笑って、門脇は言った。

「当たり前じゃん。私最強女子だからね。」

「男子じゃなかったんだ？」

「…うらあ。それ冗談になんないから。」

ボーイッシュな門脇が微妙に女に見えた。

「何よ。」

「べつに。用がすんだら早く戻れ。俺は昼寝すんだよ。シッシ。」

「えー？まだ1時間目も始まってないじゃん！」

「ばか。そんなに俺が好きだよ。」

「っせえな。」

俺は照れてんだよ。

「分かったわよ。また来るね。」

「もー来んなボケ。」

「ふーんだ。山田より頭いいから。」

門脇が女子の群れに戻った後、佑樹が俺を意味有り気に見て来た。

「良かった良かった。シユウもやーつと彼女が出来そうだな。」

「有り得ねえ。」

「良いと思うんだけどなあ。人気モノの門脇と不良に憧れるシユウ。いい画じゃん。」

「ほっとけ。俺は寝る。」

ハズい。なんなんだこの恋しろ的な佑樹の言葉は。

恋とか、柄じゃねえんだよ。

ポイント

彼女有りと彼女無しはどう違うんだろう。俺は自分の席から見比べる事にした。

行正と佑樹は彼女有りだが、そう考えて見ると女子に優しいような？

綾部…余裕が無さそう。

うーん。

「見た感じは変わんねえなあ。」

「なーに書いてんだ？」

佑樹にノートを取り上げられた。

「ちよっ…見んな！」

「なにになに？彼女有りと彼女無しの違いねえ。」

「教えてやるうか？」

ニマニマ笑う佑樹と行正に腹がたってきた。

「いいし！自分で追求するから。」

「シユウにはムリムリ。」

「強いて言えばポイントの稼ぎ方の違いかな。」

俺は佑樹からノートを取り返し、行正の言葉を書き込んだ。

「…で？何のポイント？」

「だから印象良く見せるポイントだよ。」

「おいおい、必死だな。俺の場合インパクトかな。彼女に他の奴らより印象を与えたみたいな。」

「ふむふむ。」

カリカリと俺はノートに書く。てか、何必死で書いてんだ俺？

「ペンを止めない。」

「バカバカしい。やめだやーめ。」

らしくねえな。

「俺ら便所行くから。」「じゅーっくり。」

そそくさといなくなる二人を疑問に思っていると、誰かに肩を叩かれた。

「やーまだ。珍しく盛り上がったね。」

「門脇サン。」

「えー？なぜにサン付け！？」

最近昼休みに門脇が来る。寝たフリしてもバレるし、図書室に逃げても門脇は俺を見つけてるんだ。

「彼女有りと無しの違いねえ。」

「見たな？どいつもこいつも勝手に見んなよ。」

「違いなんてないよ。」

最強女子の意見か。聞くのも悪くない。

「最強女子が教えてくれんの？」

「まあ、山田に教えるのわ勿体無いけどね。知りたい？」

ズイツと顔を近付けられ、「おう。」と反射的に後ろに顔をそらす俺。

ショックを受けもせず門脇は話を続けた。

「両想いになって付き合うつて簡単じゃないんだよ。恋の神様が叶えてくれなきゃ…って何笑ってんのよ！」

「ぶつくつく…。わりい、門脇が顔に似合わずメルヘンな事言うから…くくっ腹いてえ！」

「さいつてー！ー！」

しーん。教室が静まり返って。

「は？」

「あんだなんか、一生彼女できないわよ！」

また、教室のざわめきがもとにもどる。てか、教室にいる奴ら俺が彼女出来ねえ事に納得したのかよ。

「余計なお世話だよ。お前からスもごっつ。」

「今言っつ？」

口を塞がれ、息が苦しい。

「ごほっ…だから女は意味分かんねえんだよ。」

「デリカシーのないあんたに分かるはずないわね！ふん！」

昼休みなのにイライラが溜まった。くそお、サボりてえ。

「綾部、サボろうぜ？」

「門脇サン睨んでるぜー。怖いからパス。」

門脇を見ると、フンと顔をそらされた。

「知るか。」

が。教室を出た瞬間、行正と佑樹につかまれ強制連行される虚しい

俺。

「シューウ。これ以上はサボらせないよ。」

「奥さんも見てるし、お勉強しましょうねー。」

「誰が奥さんだ？わっかんねー。」

ふざけた佑樹を睨んで、俺はしぶしぶ着席した。

カタカタカタカタ

「シューウうるさい。」

授業中、貧乏揺すりを行正に注意された。門脇が嫌でも視界に入る。なぜなら二個前の斜め前なのだ。

「…足よ静まれー。」

「ぶっ…ちよいウケる。」

行正をちよいウケさせ、ダラダラ長い黒板の数式をへろへろな文字

でうつす。

「行正―後で写させてくりい。」

「珍しく写すんだ？いい進歩だね。」

テスト前しか写さない俺。なんか、急に勉強しなくなった。

そして休み時間。

「シュウ…シュウ！」

ビクッと俺は目を覚ました。

「俺寝てた？」

「ああ。爆睡してた。」

「ノート…。。。」

「まだ早いかなー。」

厳しい行正くんでした。

シャツフル

私は門脇麻琴。人の面倒を見るのが大好き。そして、人に流されな
いのが私の唯一のイイトコロかな。

山田シュウを好きになったのも、隣の席になった時、山田をほつ
けない事から始まった。

「ちょっと、山田。次当たるわよ？」

「んー…あと二枚。」

何が二枚か少し気になったが、私は机を横から軽く蹴った。そした
らビクツと起きて私を睨む。

「…お好み焼きは？」

「何寝ぼけてんの？」

その時山田はまた眠っていた。学校にいる半分以上は寝てる。その
友達はしっかり者の江藤行正とチャライ岡佑樹。まるで正反対の三

人だけど女子には評判が良い。

私は最初、山田があのと仲が良いのか謎だった。

しかし、ある日信じられない光景を目の当たりにする。

「ねえ、あんな人クラスにいた？」

誰かの第一声から朝の教室はざわめきだした。

「普通にカツコイイよね。」

「転校生？」

そこへ江藤と岡が教室に入って来た。

「お、シュウ。今日キリつとしてんな？」

「その髪型自分でしたのか？」

「朝飯食ってたら姉貴にいじられた。」

そのやり取りを見てみんな核心した。コイツは山田シュウだ!と。

シャキっとした山田シュウはカツコイイ。

けど、私は寝ぼけた山田も気になるようになった。

「ジロジロ見んなよ。」

「よだれの아트ついてるよ。」

「うわっマジだ。」

そんなわけでボサボサ頭でボケーっとした君が好きだったりする。

フィンガー

久々に台所に立ったら案の定小指をヤケドした。急いで氷で冷やした。したら、焼きうどん丸焦げ。

結局、カップラーメンを食った。

「たっだいまあ！」

「姉貴おかえりー今日父さんは残業で母さんは婆ちゃんち行くから遅くなるって。」

「そ？あんたヤケドしてるじゃん。薬塗った？」

「薬あんの？」

戸棚の上の薬を投げられ、キャッチした。

「てか、もうちょいでラーメンに入るところだったし。」

「まーた野菜食べてないわね？冷蔵庫にレタスあるからちぎって食べなさいよ。」

「へいへい。」

「姉ちゃんは餃子食べよっかな。」

「えー？俺も食う。」

そんなこんなで餃子も食った。

「シュウってさ、彼女いないの？」

テレビ見てる時いきなりの質問。

「は？その話どのへんから来た？」

「仲が良い友達には彼女いるんでしょ？疎外感とか無いの？」

「疎外感？意味分かんねえし。」

「疎外感ってゆーのは…」 「その意味は分かるって。」

姉貴が言いたい事は分からなくもない。行正も佑樹も休日は彼女と会ってるから遊べねえし。他のダチは何か気い使っただよな。

「寂しかった？」

「んだよ。」

「そう起こんないの。てわけで姉ちゃん彼氏と会ってくるね。」

うるさい姉貴が部屋を出て一人ポツンとテレビを見る。

テレビの中の奴らは馬鹿みたいに笑ってるけど楽しくねえから消した。

彼女ねえ。

門脇の顔が浮かび俺は自分の部屋に入って、携帯をいじった。

「げ。」

写メにたまたま門脇がうつってた。今まで全く気付かなかったし。なんだこのむず痒い変な感情は！

一番彼女って言葉に縛られてんのは俺だ。

イメージ

きつと皆は俺がただ眠ってるだけだって思ってるだろう。

ンが、しかし。

俺はイメージしてる。例えば、一人一人の人生にバックミュージックがついていたら、今の俺はカノンが流れてるだろうな。とか。ジョン・レノンのイマジンとか。

結局はくだらない事ばかり考えてんだよな。眠ると嫌な事忘れられる。苦しい事もヨダレも流れる。

ヨダレは流したくないが。

「朝だよ。」

なぜアラジンの曲が頭の中で流れるんだ。

「やーまだ。そんなに寝てると牛になるよ。」

「ジャスミン…。」

「は？」

「何でもアーリマセン。」

俺が寝る理由。

…徹夜でゲームするからだけど。

「馬鹿にしたでしょ？色黒だからとか！」

「は？お前白いじゃん。」

【アホーニューワールド初めてのの世界】 幼心で聞いた歌詞なので
超アバウト

「白くは無いわよ。」

「あーバイバイ。」

こうして俺の昼寝は終わった。

バコーン

「いてっ。門脇ィ！消しゴム投げんなし。」

「べー。」

可愛いヤツ。

は？

ぜんっぜん可愛いくなえし。何寝ぼけてんだ俺。

俺が寝る理由それは？ただの現実逃避かも知れない。

伝えたい心

ふと気付けばもう山田シユウを見てる。悔しいくらい好き。本人はほとんど寝てるから私になんて気付かない。

私から声かけないとチャンスはゼロ。めんどくさがりの山田の性格のおかげで他の女子と二人きりで仲良く話すのは見たことない。

「痛い。」

「え？」

寝てると思った山田が急にむくつと起きた。

「お前の視線刺さる。おーいてえ。」

「門脇、シユウは照れてるだけだから。」

行正くんに言われると何でも納得できてしまう。

「視線って気づくもんなんだね。」

山田が赤面したから私はびっくりした。

「天然すか？」

「え？ええ！？」

行正くんは彼女の元へ行った。私と山田はしばらく目を剝らせずにいた。

もう両想いだよね？けどもう少しだけこのトキメキを味わっていたい。

また机につつ伏せる山田がなんだか凄く男の子に見えたのだった。

未来の俺

寒空の下、20歳の俺は何やってんだろ。つまんねえ学校通って授業中寝てる今の俺には全く想像がつかない。当たり前のように隣にいるダチもよくツルむアイツともいつか離ればなれになるんだよな。

「山田。掃除サボっちゃ駄目でしょ？」

「ちよつとここ座れ。」

門脇は文句言いながら俺の横にしゃがんだ。

「ひぁーここ寒くない？風ピューピューじゃん。」

校舎と校舎の間でわりと人目につかないこの場所は俺のお気に入りだ。

「文句言っつなつつの。」

「…で？サボってまでする話？」

「20歳の自分とか考えた事あるか？」

「山田でもそんな事考えるんだ？」

クスクス笑われて言わなければ良かったと後悔した。

「私は20歳になっても何年たっても変わらないでいたいよ。」

「…。」

「山田の世話やきたいしね。」

「ん？それは俺にプロポーズしてんのか？20歳まで俺を好きなら…おい、ちよっ…門脇！」

「目の前の掃除をしようね。」

チャイムが鳴って門脇も走って俺の前から姿を消した。

俺：

変なコト言っただけ。

「20歳まで俺を好きなら結婚してやるっか？」

これだけは核心でできる未来だ。門脇は最後まで聞いてくれず。寂しい独り言と化した。

40

ああ。好きだよ。

門脇麻琴が好きだ。

言えない言わない現在。成人したら変わるのか？きっと何も変わらないだろう。

K i s s

佑樹とその彼女のキスシーンを朝っぱらから目撃した。

覗いたわけではなく、普通に通学路歩いてたら、二人がキスしてたというパターンだ。俺もガキじゃねえから？別にドキドキなんてしねえし。

ドクンドクン…

「おっはよー!」

「っお…はよ。」

「何をもってんの？変な山田ー。」

俺を馬鹿にするように笑う門脇の唇に目が行く。ツヤツヤして柔らかそうだな。グロスっての？つけてんのかな。

「やだ！唇荒れてるからあんまり見ないですよ。」

「は？見てねえし。」

唇を隠されてイケない気分になってしまいそうになり、目をそらした。

教室に着くと、まだアイツらがイチャこいてやがる。いつもなら適当に冷やかすのに今日はシカトしてしまった。

「山田くんどうしたんだろうね。」

「また後でチューしよねー茜ちゃん。」

後ろから佑樹が俺の肩に手を置いた。

「シユウ？俺にあいさつ無しかよー？」

「ヤンキーかお前は。」

「目も合わせないとは俺何かした？」

「待て！」

「は？」

「次の休み時間まで待て！」

俺は教室から脱出した。ほんとはちょっと……いや、かなり羨ましかつたんだ。俺も門脇（？）とキスしたい。

なんて妄想してばっかだったから、あの図は衝撃的だった。

ただ言えるのは

朝のキスシーンは心臓に悪いからこのドキドキを誰かしずつめてくれ。

それだけだ。

アンサー

チラッ…。

「シユウ、お前門脇見すぎ。授業中眠れないから変だと思ったたらソ
ンナ事か。」

「行正は黒板見ないで余裕だな。」

「俺の彼女は違うクラスだって知ってんだろ？」

軽く睨まれる可哀想な俺。待てよ…てかむしろ、あの何でもパーフ
エクトな行正に羨ましがられているというオイシイポジションじゃ
ね？

「そーか。俺が羨ましいのか！」

「ハイハイ。何も考えてない所がな。」

1時間目からいつもと違う俺。しゃべっても注意しない先公は変わ
らないが、何度チラ見しても門脇が元気がない気がする。朝一に俺

に声かけて来ねえし。

やっぱアレか？コレか？それだ。

他に好きなヤツが…

「山田、次の黒板の問題解け。」

「…はい。」

うなっていた俺にさすがに痺れをきらした先公が目の前に立ってたからびびった。だって俺の席一番後ろだぜ。

行正がノート見せてくれるけど、黒板から見えねえし。国語とか一番苦手だ。門脇が遠慮がちにノートを机に立ててる。

黒板から見えたけど、俺は俺なりの答えを書いた。

「ほう、山田もたまにはやるな！」

と何やら俺の答えに書き足す先公。かなり言葉が足りなかったのに、俺の答えを生かしてくれた。席にもどると行正がフツと笑った。

「アレどう見ても間違いだよな。シユウが答えんの嬉しかったんじやねえの?」

そっか。

答えを書く前から諦めちゃ駄目なんだ。この授業が終わったら、門脇に元気がない理由を聞こう。

くれぐれも緊張が伝わらないように。

目がさえる朝は久しぶりだ。

教えてくれ

門脇に俺から話しかけるとか久しぶりすぎて、門脇の席までの道のりがこの上なく長く感じた。

クラスメイトに声かけられても耳に入らない。

「か…。」

「麻琴トイレ行こ。」

「うん。」

トイレに負けた。

教室の入り口で待ち伏せすることにした。

…来た。今度こそ！

「門脇い!!」

やべえ。声がうわずった。笑われてるし。

「山田行く。」

門脇は笑ってなかった。嬉しい。

「山田から声かけてくれるなんて雪が降るんじゃない?」

笑顔なのに泣きそうで俺は階段で門脇を抱きしめた。

「冬だから雪は降るじゃねーか。」

「…ん。」

「何かあったのか?」

ビクッと反応した門脇。

「あのね。恥ずかしくなったの。」

何だこの可愛い生物。

「恥ずかしい？」

「だって山田私の事好きでしょ？」

顔を見たくなくて、少し身体をはなした。“女”な門脇に目を奪われた。

「ああ。好きだよ。」

ここから俺の

恋の物語が始まった。

【END】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0213p/>

脱力系ダンシ

2010年12月16日00時53分発行